新会長挨拶

2021 年 1 月 5 日

新会長　赤井伸郎
（大阪大学国際公共政策研究科教授・同研究科長、
全国クルーズ活性化会議顧問、日本港湾協会理事）

あけましておめでとうございます。日本クルーズ&フェリー学会の会員の皆様に新年のご挨拶を申し上げます。このたび、学会創始者であられる池田先生、その後を引き継がれた梅田先生の後任として、総会の議決を経て、第 3 代の会長の重責を仰せつかり、日本クルーズ&フェリー学会の新会長として就任いたしました赤井伸郎（大阪大学国際公共政策研究科）と申します。会員の皆様のご協力をいただきながら、微力ながら、精一杯努めてまいりたいと思っております。

日本クルーズ&フェリー学会は、2010 年に誕生しました。池田先生がこれまで非公式に行われてきた、客船に関わる歴史・現状・課題を研究する仲間が集まる会議を発展させる形で設立されたものであり、10 年以上になります。ここまで継続できているのも、初代会長の池田先生、第二代会長の梅田先生のご尽力によるものです。私はまだまだ微力ですので、両先生には、引き続き、学会運営をサポートしていただき、学会を盛り上げていければと思っております。

クルーズ客船やフェリーは、単に目的地を目指すための移動手段ではなく、その存在や運航継続自体が大きな価値を持っています。まず、フェリーは、物流への貢献はもちろんですが、離島航路など生活路線確保や、島の観光振興を通じた地域活性化にも貢献しています。次に、クルーズ客船は、まず、客船自体が旅の目的地にもなっており、手軽な費用でさまざまな体験ができる究極のテーマパークになっています。また、クルーズ客船は季節ごとに日本中の津々浦々の港に寄港し、その地域の魅力を全国に伝えるとともに、地域住民に元気を与え、地域経済を潤し、地域活性化にも貢献します。世界では、カジュアル化・大型化（規模の経済性・日常レジャーの延長線上としての船内・多様なレジャーの提供）と、ラグジュアリー化（特別な目的地も含む非日常体験）の 2 極化が生じているように思います。それぞれがクルーズに秘めた可能性をさらに進化させています。

昨今では、クルーズ客船やフェリーは、社会課題への対応手段としても注目されています。車による移動に比べ、環境にやさしい移動手段であり、モーダルシフトによる CO2 削減を通じて環境に貢献します。さらに、大量輸送が可能であり、人手不足への対応も期待されて

います。ただし、クルーズ客船やフェリーにも課題はあります。海洋汚染への規制は日々厳しくなっており、その対応は、避けられません。直面する課題を乗り越えてこそ、社会に役立つものとなります。進化が期待されます。

コロナ禍においては、感染対策として、移動が自粛・制限され、クルーズ客船もフェリーも多大な影響を受けました。特に、「3 密」によってコストパフォーマンスを高め、様々な体験を提供してきたクルーズ客船は、避けられるようになってしまいました。クルーズ業界は、逆境の中、感染対策とビジネスモデルの両立に向け、必死で新しい挑戦をしており、すでに、欧米を中心に、クルーズ客船の運航はコロナ前の水準まで戻っています。ただし、事前の PCR 検査など、いかなる感染対策を行ったとしても、コロナウイルスを完全に封じ込めることはできず、コロナウイルスとの共存の道を進むことが現実的です。新しいクルーズスタイルを追い求めていく日々が続くでしょう。

日本クルーズ&フェリー学会は、上記で述べた様々な視点を、技術面、経済面、文化面から議論し、社会にメッセージを発信していくことで、学会の意義が高まると考えます。海運・造船・港湾・観光の関係者のみなさまの実践者の視点、船や船旅を愛するみなさまからの利用者の視点、研究者の皆様のアカデミックな視点を、有機的に融合し、クルーズ&フェリーというキーワードで集まる学会ならではメッセージを、皆様とともに社会に発信していければと思います。

以上でご挨拶とさせていただきます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。